



欧米視察旅行(1935年5-12月)  
南ドイツの酒場の前で。



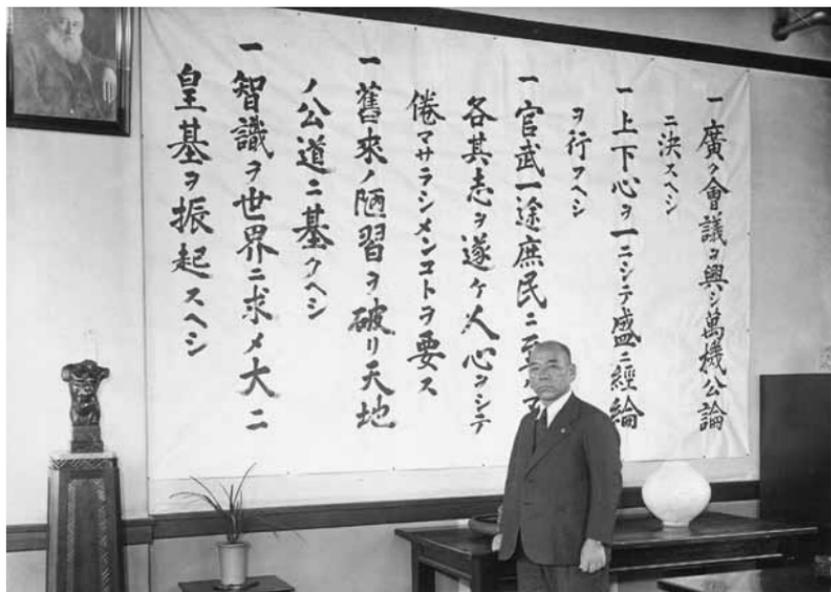
欧米視察旅行  
(1935年5-12月)  
モスクワ、トルストイ  
の旧居前で。



自然科学書の著者たちと(1938年頃)  
前列左から藤原咲平，武見太郎，仁科芳雄，  
後列左から岩波茂雄，中谷宇吉郎，太田永福，  
小林勇，藤岡由夫。



岩波新書の創刊(1938年11月)



店主室に五箇条の御誓文を掲げる  
(1939年12月)



熱海の梅林にて(1940年頃)  
岡田武松(右)と岩波茂雄。



店員食堂にて(1940年5月)



北軽井沢にて  
(1941年8月)  
左から久野収、  
岩波茂雄、津  
田左右吉。

目次

収録資料名一覧

凡例

I	科学の普及を目指して	一九三六—三七年	1
II	日中戦争と岩波新書	一九三八—三九年	139
III	「出版新体制」のなかで	一九四〇—四一年	207

解 說	331	主 要 參 考 文 獻 一 覽	277
			329

収録資料名一覧

I

- 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177
- 新婦朝の岩波茂雄氏に欧米書店界を聴く  
所感
- 科学思想の普及  
噫雄造君
- 『欧米漫遊談』を岩波茂雄氏に聴く  
〔都制政府案に対する意見〕  
〔木下信推薦状〕  
〔宮沢胤勇推薦状〕
- 刊行の辞『大教育家文庫』  
〔第一九回衆議院議員総選挙後の所感〕  
〔丸山鶴吉に宛てた第一九回衆議院議員総選挙後の所感〕
- 『欧米漫遊談』を岩波茂雄氏に聴く(続)  
〔出版組合についての意見〕  
大愚の境地！ 開拓を希望  
諸家に聴く
- 我が眼に映じたる日本国家社会に於ける不合理的存在とその排除策  
御挨拶  
私の安住処  
私の夢の傑作

- 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199 198 197 196
- 政治屋と俗僧  
岩波講座「東洋思潮」所収友松円諦氏著『印度社会経済思想』について  
刊行の辞『能面』  
〔阿部真之助宛抗議文〕  
小宅騒市氏へ
- 大方の諸君子に御願ひする  
脱退はしても市政の刷新へ  
「岩波の謝罪方法」に就いて  
刊行の辞(岩波講座『国語教育』)  
刊行の辞『寺田寅彦全集 文学篇』  
比丘庄太郎氏に呈す  
学問と言論の自由が解決  
信州の青年諸君へ  
迷信を斯く見る  
〔田中松太郎表彰慰労会案内〕  
〔岩波講座『東洋思潮』の執筆者宛書簡(年賀状(一九三七年))〕  
推薦文
- 科学精神とヒューマニズム  
読書週間に際して所懐を述ぶ  
今後の宗教に何を求むべきか？  
青年修練の指導標  
黒色事件を直視して  
〔ラジオ体操参加の呼びかけ〕

- (新聞の第一面について)
- (科学雑誌の任務等について)
- (議会に対する期待)
- (ルーズベルトについて)
- 日本読書新聞の任務
- (近藤乾郎推薦状)
- (近藤次繁推薦状(書状))
- (近藤次繁推薦状(はがき))
- (近藤次繁当選報告)
- (市議選の結果ならびに今後の市政について)
- (安部磯雄推薦状)
- (三輪寿壯推薦状)
- 新東京市会に呈す
- 百号を祝す
- 喜美子さんのこと
- 助役問題寸観
- (購読紙について)
- 刊行の辞『能面』(英文)
- 寸尺の寄与
- 日本の良心に聞く 文化を育てる者
- 羽田武嗣郎君を出版界に迎へて
- 刊行の辞『二葉亭四迷全集』
- (日中戦争とアメリカについて)
- 統制に堕せる新聞

- (年賀状(一九三八年))
- 刊行の辞『鈴木三重吉全集』
- (二女美登利結婚祝に対する礼状)
- 古本で暴騰する 岩波講座は再版するか 岩波茂雄氏に意中を聴く
- (幼少期の印象)
- (貯蓄の推奨)
- (『一商人として』の広告文1)
- (『一商人として』の広告文2)
- (銃後の青年に対して)
- 東駒の思ひ出
- 岩波文庫論
- 古典の普及 支那をも尊重 新世界観の創造へ
- 時局下の雑誌観
- (岩波講座『物理学』の執筆者宛書簡)
- 岩波新書を刊行するに際して
- (『国語 女子用』に関する教育関係者宛書簡)
- 刊行に際して(普及版『吉田松陰全集』)
- 基金募集に際して
- (蓑田胸喜宛書簡)
- (年賀状(一九三九年))
- (軍関係者宛書簡の草稿)
- (国民精神総動員の強化に関する意見)
- (朝吹氏と語る)

- 288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271 270 269 268 267
- 源氏物語の刊行に寄せて  
新市長への注文  
弔辞〔伊東三郎〕  
何を改革すべきか  
五箇条の御誓文 この精神を体得せよ  
思ひ出の野尻湖  
直言 日英東京会談に寄す  
日英会議に要望する  
児童に、心の栄養  
林虎雄君を推薦す  
〔阿部信行内閣について〕  
欧洲戦争は本格的になるか？  
謝礼五十円  
〔現代青年への希望・尊敬する人物〕  
信州の野菜のごった汁  
〔国語〕採用礼状
- III
- 288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271 270 269 268 267
- 回覧書籍の普及を図り紙飢饉に対応せよ  
誠実を教へた母  
〔春季大会案内状〕  
〔出版法違反により起訴された際の見舞いに対する礼状〕  
濔子さん  
刊行の辞『山鹿素行全集 思想篇』
- 310 309 308 307 306 305 304 303 302 301 300 299 298 297 296 295 294 293 292 291 290 289
- 〔国書解題〕再刊事業発起の挨拶  
出版新体制を衝く 統制もよいが人の問題  
今後の出版界  
大政翼賛運動の指導者たちへの要望  
風樹会設立の趣旨  
風樹会の設立について  
〔帝国大学新聞〕創刊二〇年記念会での挨拶  
亡き母への慰霊に  
多方面な才能の人岩下壮一師  
〔安倍能成歓迎会案内状〕  
〔東京女子大学同窓会宛 供託金募金依頼状〕  
全国の書籍雑誌小売業者諸君  
〔日本人の欠点等について〕  
片雲録  
事変下の出版と其理念  
〔岩波書店に対する意見を求める書状〕  
岩下さんを憶ふ  
〔伊東三郎三回忌案内状〕  
〔久保田力蔵推薦状〕  
〔出版法違反被告事件公判速記録より〔冒頭陳述〕〕  
日本の出版事業について  
五千号を祝す

## 凡例

- 岩波茂雄の著作については、その大半をタイプ原稿にしたものがある。タイプ原稿には、原稿作成の際に参照したと思われる資料名や、資料の種類（「草稿」「印刷書状」など）が書き込まれているものが多い。本文集の作成にあたり、タイプ原稿のみを底本とする場合や、初出の活字資料との異同が大きい場合などには、それらの書き込みについて、巻末の解題に記した。
- 本文作成時の典拠の優先順位は次の通り。(1)新聞、雑誌、内容見本などの活字資料。(2)『茂雄遺文抄』(岩波書店、一九五二年)。(3)タイプ原稿。(1)・(2)と(3)との校異については、重要と思われるもののみ巻末の解題に記した。
- 本文集には、活字資料やタイプ原稿の存在が確認できない、岩波書店所蔵の草稿も翻刻、収録している。その場合は、巻末の解題にてその旨を記した。
- 「」が付いているタイトルは、元の資料にタイトルがない場合などに付けた便宜的なものである。
- 漢字は原則として常用漢字表に従って新字体とし、旧仮名遣いはそのままとした。
- ルビは適宜省略し、傍点はそのままとした。また、句読点や文中のアクセントは一部整理した。
- 誤記・誤植等、修正の必要があると思われる箇所については、正しい表記や語に改めた。
- 本文中に、現在では問題を含む語句や表現が使用されている場合があるが、原文の歴史性を考慮してそのままとした。

I  
科学の普及を目指して  
一九三六—三七年



（一九三六年）

177  
新帰朝の岩波茂雄氏に欧米書店界を聴く

『日本古書通信』第四七号、一九三六（昭和一一）年一月一日

今更らしく紹介する迄もないが我国学術出版界の王者岩波書店の主人岩波茂雄氏が昭和十年四月「ふらり」と外遊の途に就き以後八ヶ月間欧米二十数ヶ国の漫遊を終へて、去る十二月十三日午前帰朝された事は既報の通りである。記者は二十七日一ツ橋の同店出版部長室に同氏を訪問し新婦朝談を聞いた、同氏の新知識と抱負こそ現在の混□<sup>（マ）</sup>せる我国書籍業界に一脈の光明を指示するものであらう。

八木\* あちらの本屋の様子を承りたいと思つてお伺ひしたのですが……ケーラとかホツクとかローレンスと云ふ本屋は新古兼業をやつてゐるさうですネ。

岩波 やつてゐます。僕はホツクも<sup>\*</sup>レグラムも見ましたが、大きな物ですよ。印刷も製本も皆自店でやつてゐます。

八木 日本の新聞社みたいな制度ですか。

岩波 さうだね。レグラムなんか一切やつてゐますからね。

八木 一階は小売で二階は編輯と云ふ工合ですか。

岩波 まあさうだね。ローレンスは小売専業でやつてゐます。

**八木** 日本で云へばどう云ふ風な建物でせうか。

**岩波** 建物は天井が高く、そして中二階になつてゐて上の方の本は勝手に梯子段を登つて取るやうになつてゐる。又地下室なんか豪華なものだよ。レグラムなんか校正掛が二、三人しかゐるなかつたね。あれは一年間に本を余り出さないで古いのをどん／＼出すのでさうなつてゐるんだ。

**八木** 向うぢや単行本の生命が長いのでせうか、此間或雑誌に英国では新刊の生命が短かくなつて本が沢山出て弱つてゐると書いてありましたか……。

**岩波** 現代は何処でも随分出てゐますよ。

**八木** 亜米利加では雑誌が特に安い相ですが……。

**岩波** 亜米利加は特別安いね。単行本はあまり安くはないんだが雑誌だけは安いよ。英国では相当高いですわね。

**八木** 日本では本の定価が一般に下つたと云はれてゐますが。

**岩波** 日本のは箆棒に安い。露西亞辺りはあゝ云ふ国で安くあつて然るべきだが高いよ。露西亞の国立出版所の大将に会つて話したが、最近出来た「メトロ」と云ふ立派な本を見せて貰つたが、此の「地下鉄」に関する本を十万とか刷つたが忽ち売切れたさうだ。一冊十円と云ふ。それで貴方の方では十円か知らんが、僕等の資本主義国でやれば半分ですよと僕は云つた。何にしろ向うは国家が儲けてそれを他へ運用するんだから文句は云はない、日本では個人が儲けて勝手なことをするか文句が出るんだ。露西亞では国家が全部やるんだ。例へば国立出版所で委員会を開き、其処で一年中の方針を決めて、あれを出す之を出すとか云ふやうに分けてやるんです。資本は無論貸し

てやらせるのです。そして儲ければ配当を分けてやり、大部分は政府が取りその経営が拙ければ辞めさせて了ふ。

**八木** 独逸なんかのファツシヨ的なものと現在の露西亞の制度とはどう違ふのでせうか。

**岩波** 大体露西亞も独逸も伊太利も国家社会主義と云ふ傾向は同じだが、ロシアは個人の資本企業を認めないところが、他と根本相違の点でせう。

**八木** 露西亞にも小売店の組織がありますか。

**岩波** ありますよ。教科書は市場で以前は売らなかつたが、今はどん／＼旺んに売てゐる。露西亞では驚く程売れるんだよ。知識慾が旺んだし、物資も豊富で印刷がどん／＼出来るから本の数も多い。僕は国立出版所で残本はどうするかと云ふことを聞いたところが、そんな心配はない。片つ端から売れて了ふと云ふ。再版の間がない、だから露西亞の日本大使館辺りで露西亞人の有名な小説が出たのを買はうと思つても本が中々手に入らない。こんな調子だから残本の心配は少しもない。

**八木** 古本屋の組織はありますか。

**岩波** やはりあります。日本の物なんか非常に特殊なものは政府の許可を得なければ出せないんだよ。露西亞文で日本の歴史の書いた本がシヨウウインドーに飾つてあつたのだが、政府の許可を得なければ国外へ持出せない。

**八木** お廻りになつた二十数ヶ国の中で書籍の小売店の数の多いのは露西亞でせうか。

**岩波** モスコゝあたり特に小売店の多いのに気付いた。露西亞の出版界は非常な勢で勃興してゐるね。言論の自由が手綱を緩めかけて来たので、昔の革命の宣伝ばかりでなく非常に出版界は勃興して来

た。

八木 露西亞に日本經濟研究所と云ふのがありますね。

岩波 日本の物ばかり集めた処もあるさうです。

八木 日本人がやつてゐるのですか。

岩波 日本人も居るが露西亞人がやつてゐるでせう。

八木 オックスフォードやハーバードの大学には本屋が沢山並んでゐますか。

岩波 余りないね。彼処にはカレッヂが三十か四十あるが、本屋にはあまり気が付かなかつたね。

八木 米国の議院図書館はどう云ふ風になつてゐますか。

岩波 華盛頓にあるコンGRESライブラリーでせう。あれは立派だよ。普通の図書館と書籍關係の博物館と一緒にやつてゐるものと考へたらいでせう。

八木 組織は日本と同じですか。

岩波 いや料金なども取らないし、誰が入つても構はない。研究する者は別室へ入つて静かに本が読めるやうになつてゐる。

八木 時々斯う云ふ話を聞きますが、古い物でも高い物が出た時、それが博物館で買へない時は一般から義捐金を募集して……。

岩波 それは英吉利辺りでもやつてゐます。予算がないから義捐金を募ると云ふので能くやりますよ。亞米利加辺りでは非常に寄附する者が多い。図書館にしる基本金が山のやうにあつて学校としては私立が立派で官立はへぼな者しか入らない。

八木 こつちと反対ですね。

岩波 英吉利では家庭で教師を取るのが、ハイクラスで、次ぎが私立、官立は貧乏人が行くと云ふことになつてゐる。

八木 映画などを見ると家庭の応接室に書棚の大きながありますが、あれは普通の家庭にもあるんでせうか。

岩波 それは特殊な家だらうね。普通の家には見えなかつた。

岩波 倫敦のタイムス\*、ブック倶楽部は日本に紹介したいね。日本で云へば回読会だね。タイムス社でブック倶楽部をやつてゐる。会員から日々何円か取つて、新刊の雑誌をどんぐり廻して五円の会員には是だけの物を廻す、十円の会員には是だけの物を廻すと云ふ組織になつてゐる。とても旺んだ、下は古本の安いのもや新刊も売るし、二階は貸本の事務所になつてゐて実に旺んだ。日本でも是非やりたいと思ふ。君等もさう云ふ仕事に携はる一人として大いにやらなければならぬ。

八木 日本の貸本制度は明治時代にありましたが、現在は余り見かけないやうです。現在では貸本屋から借りるより新刊を買つて古本屋に売つた方が気持がよく、借賃位の金額で済からでせう。古本を買つて読んですぐに古本屋に売れば一番簡単です。

岩波 斯う云ふやうに経済が発達して来たから、買つて永久に置くと云ふ本ならいゝが、一読して不用になる様なのは古本屋で間に合はせてもよし、結局は読書力を増さなければならぬ。回読会を奨励するのは本屋、雑誌社の為になるから是は大いに考へなければならぬ。日本の現在の様に尻の穴の小さな事を言つて居つては、読書力を萎靡さすばかりだ。是は一つ組合の幹部の人達にも話

して見ようと思ふんです。

**八木** 書籍の自働販売機があるさうですが、あれは岩波文庫のやうな文庫類だけを売るんですか。

**岩波** 停車場辺りに能く置いてあります。二十銭とか六十銭とか入れると本が出て来る。沢山並べて

あつて此の本が欲しいと思へば入れ、ばい、んだ、穴が幾つもあるよ。

**八木** 外に何か御感想を伺はせて頂けないでせうか。

**岩波** 独逸辺りは自由が束縛されてゐるから振はないですね。その点英吉利辺りは不況だとかなんとも云つても財政に余力があるから相当に出版界は活況を呈してゐる。仏蘭西、伊太利などはそれ程でもない。やはり何処の国でも同じだが、現代に於ては表面に浮かび上つてゐるものと時代の底を流れてゐる古典的なものと両方の傾向がある訳だ。古典的なものに親しむと云ふ傾向は何処の国にもあると云ふことは事実だね。

**八木** 外国でも日本のやうに小さな出版屋がばた／＼倒れてゐるのでせうか。

**岩波** それは余りないね。さう云ふ／＼したことはない。比較的呑気だね。同じ品物を十法で売つてゐる店があるかと思ふと、その隣では八法で出してゐると云ふことはざらにある。日本ではそんなことがあるば直ぐ値を下げて競争する。あちらでは日本のやうに／＼やらないらしいね。自分のオリヂナルテイを持つて立たうと云ふ気があるんだ。ヒットラーなども日本人は創造力がないと云ふことを自分の著書の中に明記してゐるよ。

**八木** 向うにも『古書通信』のやうなものがあるさうですが御気付きになりませんでしたか。

**岩波** 各書店ではやつてゐるね。

八木 独立した経営方法でやつてゐるのはどうでせう。新刊広告を掲載すると同時に古書の紹介をすると言つた様な。

岩波 あるね。新聞の広告は割合は少ないから。

八木 新刊の批評は何に依つて知るんですか。

岩波 英吉利に例を取れば、タイムスに一週間毎に新刊書の批評が書いてあるので、それを見て買ふと云ふ事は大分あるね。

八木 御忙しいところを色々とお難うございました。

---

八木 八木敏夫。一九〇八(明治四一)―一九九(平成一一)年。八木書店の創業者。

レグラム ドイツのレクラム社。同社のレクラム文庫は岩波文庫の手本となった。

タイムス、ブック倶楽部 読書愛好家による団体。一八世紀にイギリスで生まれ、出版者と読者を結びつける機縁を作った。

## (欧米視察)

私は昨年四月下旬外遊の途につき印度洋を経由してマルセーユに上陸爾來二十ヶ国を巡りて米国を経て十二月十三日帰国致しました。昔外国から帰つてきた人の話に、船の中とか或はその他に於て日本人たるが故に肩身の狭い思ひをするやうな場合があるといふことを聞いたが、此度私の旅行に於て船は勿論のことその他何処の国に於てもさういふ思ひをしたことがなく、一口に申せば大手を振つて世界を闊歩してきたやうな次第である。これは何としても武力日本のお蔭であると思ふ。日清日露の戦争より満洲事変に於て躍進せる武力日本は世界の第一線に立つたのである。聯盟<sup>\*</sup>に於て十三対一を押し通してその主張をまげないほど国力の発展を見たのである。氣まづい思ひなどしないのみか愉快に世界を歩き廻つて來られたことについては、忠誠を尽して国威を發揚した軍人諸君に対して特に感謝の念の深いものがある。

併し武力日本が世界の第一線に立つたからと云つて日本が総てに於て一等国の実質を備へ欧米学ぶに足らずと自己陶醉する一部の人に私は賛成することは出来ない。科学的の最尖端に於て、また科学の民衆普及化に於て、また社会政策の施設の徹底に於て少しも欧米に遜色がないか。私は日本に於ける近代文化の急速なる進展に対しては驚異の眼を見張るものであるが、根底深き西洋文化にもなほ学んでよい点が相当残されてありはしないかと考へるものである。